

昭和三十九年七月、横浜港を出帆したソ連の客船の中で、私は梅棹先生にはじめてお目にかかった。当時はナホトカ港に到着後、シベリア鉄道に乗り継ぎ、それから空便でモスクワに着いた。梅棹先生はそこで第七回国際人類学・民族学会議へ出席。私はウズベキスタンのサマルカンドへ向かった。

毎日のお会いしたのは、昭和四五年の日本万国博覧会で。私はお祭り広場で世界の祭りの制作・演出を担当。その地下では、梅棹先生も実現にかかわられた、仮面と神像約二六〇〇点による展示がおこなわれた。それが今日の国立民族学博物館の発点のひとつになった。

三年後の昭和四八年に、梅棹先生は日本写真家協会の入会審査を受けられた。資格審査の資料は、岩波写真文庫の『アフガニスタンの旅』『タイ』『インドシナの旅』の三冊で、日本の写真界に民族誌写真という分野をはじめて明示した。

国立民族学博物館が開館され、その友の会の機関誌として『季刊民族学』が創刊されたのは昭和五二年である。前年の昭和五一年に、学習研究社から『民族探検の旅』全八巻（編集長中城正堯）が出版された。全巻を日本の写真家が撮り、

プロフィール
大正10年中国大連市に生まれる。写真家。昭和25年に日本写真家協会創立者のひとりとして入会、現在名誉会員。世界の祭り・民族・民俗芸能の写真取材をおこない、現在にいたる。平成元年に紫綬褒章、平成7年に勳四等旭日小授章を受賞。おもな著書に、『日本の祭り歳時記』（講談社）、『日本の民俗（上・下）』（クレオ）、『折口信夫と古代を旅ゆく』（慶応義塾大学出版会）など。



梅棹忠夫先生と民族誌写真

はがひでお
芳賀日出男

梅棹先生が監修された。第一巻のオセアニア編では、ニューギニア東部にある高地の村々を大石芳野さんが通算六カ月滞在して撮影をしている。その中にメニヤミヤに暮らす先住民の女性が出産して、わが子のへソの緒を切る決定的瞬間の一枚がある。

昭和五六年、日本写真家協会は梅棹先生の講演会をおこなった。演題は「民族学者から見た写真」で、「写真の撮影なくして、民族学は成り立たない」と結論付けた。講話が終わると九四名の聴衆が駆け寄り、梅棹先生をかこんだ。その中の一人に大石芳野さんもいた。梅棹先生は異民族と生活を共にして信頼を得てから写した大石さんの作風に心を打たれたようだった。

昭和五七年、東京銀座のニコンサロンで個展「民族学者 梅棹忠夫の眼」を開催、アジアからヨーロッパまで四六六の写真を展示、全国七カ所を巡っておこなわれた。

平成六年には文化勲章を叙勲、日本写真家協会から名誉会員に推挙された。梅棹先生の没後、今年の三月三日から六月一日まで国立民族学博物館で第八回目の写真展が開催されている。この民族誌写真展は梅棹先生の分身として、今後も生き続けることであろう。

月刊
みんぱく
6月号目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
梅棹忠夫先生と民族誌写真 芳賀 日出男</p> <p>2 特集 骨——どこから来たの？どこへ行くの？</p> <p>3 骨から学ぶ 野林 厚志</p> <p>4 自然人類学者の奇妙なコダワリ 坂上 和弘</p> <p>6 メキシコの骸骨人形 中牧 弘允
撒かれる骨灰は語る 金 セツピョル</p> <p>8 発掘された人骨が博物館で展示されるまで 植田 直見
骨が語るとき 川越 道子</p> <p>10 研究フォーラム
国を超えるグローバルな支援と包摂 陳 天璽</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
阪神淡路大震災の記憶をとどめる 野島断層保存館 久保 正敏</p> <p>15 みんぱく 私の逸品
帆走カヌー チェチェメニ号 阮 雲星</p> <p>16 散策と思索の径
ハワイ、沖縄、フィリピンの歴史が交錯する街 原 知章</p> <p>18 多文化をささえる人びと
母語で喜怒哀楽を 文化的背景に配慮した在日コリアン老人ホーム「故郷の家」 金 春男</p> <p>20 歳時世相篇
モンゴルのナーダム 小長谷 有紀</p> <p>22 フィールドで考える
漁業開発が残したもの 吉村 健司</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|